

International Survey of Fundamental Academic Skills

国際基礎学力調査 2026



子ども・保護者の学習意識と学習習慣、
および学校のエデュケーション環境

目 次

調査の概要	P2
サンプル数・基本属性・正答率	P3
TOFASの特徴	P4
結果概要	P5
第1章：計算力の実態（TOFAS）	
[1] 計算力の国別比較・学年別比較	P6
[2] TOFASの学年別・分野別の正答率〈小4・小5〉	P7
[3] TOFASの学年別・分野別の正答率〈中2・中3〉	P8
[4] TOFASの正答率と解答率の関係	P9
第2章：子どもの学習意識・習慣	
[5] 計算方法と計算力の相関	P10
[6] 授業でのICT機器の利用頻度	P11
[7] 宿題の重要性とその理由	P12
[8] 勉強に関する質問相手	P13
第3章：保護者と子どもの意識・関わり方	
[9] 保護者と子どもの「計算力は重要」の認識	P14
[10] 保護者と子どもの計算力の自己評価	P15
[11] テストへの保護者の対応〈良い成績の時〉	P16
[12] テストへの保護者の対応〈良くない成績の時〉	P17
第4章：学校・先生のエデュケーション環境	
[13] 学校内のICT端末の整備状況	P18
[14] 学校内のWi-Fiの整備状況	P19
[15] 宿題を課す頻度と、生徒が宿題を提出する頻度	P20
[16] 教員研修の有無と参加頻度	P21



10か国・小4～中3を対象とした国際比較調査

Learning Attitudes & Study Habits of Children and Parents,
and Schools' Educational Environment

調査の背景

公益財団法人スプリックス教育財団では、教育の側面から諸問題に対する調査・研究を行い、これらの問題を社会で考える足掛かりを提供することを目的としています。

2026年は、2025年の調査から引き続き、基礎学力と意識に着目して調査を行っています。今回の対象国は10か国で、全て学校調査で、子どもと保護者に加えて先生も調査対象としました。また、対象学年を小4・中2から小4・小5・中2・中3に拡大しています。

調査の特徴

1 計算力の実態把握

国際基礎学力検定TOFAS（Test Of Fundamental Academic Skills）を用いて、小4・小5・中2・中3の4学年で計算力を測定する。

2 子ども・保護者・先生の三者調査

計算力の数値だけでなく、子ども・保護者・先生それぞれの意識・環境・行動を把握し、学力との関連を検証する。

3 学校調査方式

1学年あたり1～数校の学校での実施により、実際の教育現場に近い環境でデータを収集する。

4 国際比較

2026年は10か国（日本・フィリピン・インドネシア・ベトナム・タイ・キルギス・ケニア・エジプト・モロッコ・ペルー）を対象とした国際比較を行う。

調査概要

調査テーマ	国際基礎学力調査2026（子ども・保護者の学習意識と学習習慣、および学校の教育環境）
調査時期	2026年4月～8月
対象国	日本・フィリピン・インドネシア・ベトナム・タイ・キルギス・ケニア・エジプト・モロッコ・ペルー（10か国）
対象者	小4・小5・中2・中3相当の児童・生徒・保護者・先生
N数	子ども6,313名・保護者3,163名・先生136名／TOFAS受験者6,153名（2026年9月1日時点）
調査主体	公益財団法人スプリックス教育財団が株式会社スプリックスに委託
調査方法	1学年あたり1～数校の学校・自宅での調査。保護者と先生の回答は任意。

- 本資料は速報版であり、最終版発行時点で数値が変動する場合がある。
- 図で使用している百分率（％）は小数第2位を四捨五入して算出。四捨五入の結果、数値の和が100.0にならない場合がある。
- 一部の国では小6・中1も参加。
- 本報告書の集計時点ではフィリピンとモロッコはTOFASの受験結果が未回収のため、TOFASの結果には含まれない。

サンプル数・基本属性・正答率

TOFAS受験者 N=6,153

国	小4	小5	小6	中1	中2	中3	計	平均正答率	合格率
日本	289	344	—	—	188	110	931	74.7%	54.4%
フィリピン	—	—	—	—	—	—	—	—	—
インドネシア	228	246	—	176	128	—	778	45.2%	5.1%
バトナム	150	150	—	—	182	155	637	79.2%	65.5%
タイ	378	402	412	—	73	72	1,337	43.4%	7.8%
キルギス	23	16	—	—	24	32	95	72.5%	55.8%
ケニア	102	109	—	—	114	121	446	37.5%	2.5%
エジプト	233	207	—	—	106	—	546	51.7%	12.1%
モロッコ	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ペルー	378	337	—	—	354	314	1,383	36.9%	6.3%
合計	1,781	1,811	412	176	1,169	804	6,153	51.4%	20.9%

合格率はTOFASの正答率80%以上を取った割合。

子ども調査票 N=6,313

国	小4	小5	小6	中1	中2	中3	計	男子	女子
日本	251	308	—	—	165	106	830	47.8%	52.2%
フィリピン	65	100	—	—	80	66	311	46.3%	53.7%
インドネシア	207	235	—	173	115	—	730	51.0%	49.0%
バトナム	150	149	—	—	182	155	636	48.6%	51.4%
タイ	365	394	398	—	73	71	1,301	49.5%	50.5%
キルギス	19	15	—	—	17	189	240	50.0%	50.0%
ケニア	48	62	—	—	98	110	318	44.8%	55.2%
エジプト	95	71	—	—	48	—	214	52.3%	47.7%
モロッコ	105	91	—	109	105	—	410	51.2%	48.8%
ペルー	261	261	—	—	438	363	1,323	38.9%	61.1%
合計	1,566	1,686	398	282	1,321	1,060	6,313	47.0%	53.0%

性別は「回答しない」を除いて算出。

保護者調査票 N=3,163

国	小4	小5	小6	中1	中2	中3	計	母親	父親	他
日本	154	125	—	—	81	16	376	83.5%	15.7%	0.8%
フィリピン	67	94	—	—	53	44	258	75.6%	18.2%	6.2%
インドネシア	69	86	—	35	19	—	209	78.0%	21.5%	0.5%
バトナム	147	149	—	—	140	145	581	67.3%	28.2%	4.5%
タイ	138	91	84	—	16	7	336	75.6%	14.3%	10.1%
キルギス	11	6	—	—	11	95	123	82.9%	12.2%	4.9%
ケニア	39	35	—	—	30	32	136	62.5%	29.4%	8.1%
エジプト	99	71	—	—	34	—	204	—	—	—
モロッコ	99	87	—	39	91	—	316	48.7%	36.4%	14.9%
ペルー	238	154	—	—	126	106	624	87.8%	11.4%	0.8%
合計	1,061	898	84	74	601	445	3,163	74.6%	20.4%	5.0%

エジプトは続柄の情報なし。

先生調査票 N=136

国	日本	フィリピン	インドネシア	バトナム	タイ	キルギス	ケニア	エジプト	モロッコ	ペルー	合計
回答数	6	5	8	9	7	18	2	51	13	17	136

先生は複数学年担当のため学年別内訳なし。

TOFASの特徴

今回の国際基礎学力調査2026では、国際基礎学力検定TOFASを各国の小中学校で受験いただきました。

国際基礎学力検定TOFASは、株式会社スプリックスが提供する、国際的なオンライン検定試験問題です。

本調査ではその「計算」科目を実施しました。

出題内容は原則として、前の学年までに学んだ範囲を対象とした基礎的な計算問題で、試験時間は40分です。

レベル1・レベル2は全70問、レベル4・レベル5は全60問で、合格ラインは正答率80%に設定されています。

● 各学年の出題分野・出題例

レベル1〈小3までの範囲、小4が受験〉

分野	出題例
たし算	$659+358$
ひき算	$39-3$
かけ算	5×3
わり算	$56\div 7$
小数の加減	$0.4+0.3$
分数の加減	$3/5+1/5$

レベル2〈小4までの範囲、小5が受験〉

分野	出題例
たし算・ひき算	$19+17$
かけ算	60×10
わり算	$840\div 6$
分数の加減	$3/7+8/7$
小数の加減	$0.4+0.3$
計算のきまり	$40-20\div (5+5)$

レベル4〈中1までの範囲、中2が受験〉

分野	出題例
分数の加減	$9/5-4/5$
分数の乗除	$2/5\times 4/7$
正負の数	$(-4)+0$
文字式	$-3a-2a$
方程式	$x-5=9$

レベル5〈中2までの範囲、中3が受験〉

分野	出題例
正負の数	$-7+3$
文字式	$(5x+6)+(3x-4)$
方程式	$x-5=9$
式の計算	$(-3a-6b)+(9a-6b)$
連立方程式	$5x+5y=-5$ $4x-5y=41$

● 本報告書内での用語定義

誤答率と白紙率

誤った解答をした割合を「誤答率」、解答しなかった割合を「白紙率」と記載する。

解答率

正誤によらず解答した設問の割合を「解答率」と記載する。

計算力の3区分

上位（80%以上）・中位（50～80%未満）・下位（50%未満）の3区分で示す。国や学年によらずTOFASの正答率によって分類している。

解答率の3区分

高（100%）・中（80～100%未満）・低（80%未満）の3区分で示している。正誤に関わらずTOFASに解答した割合（白紙以外）を、国や学年によらず分類している。

- レベルと受験学年は推奨のため、一部の国では推奨レベル以外を受けている場合もあるが、本報告書ではTOFASのレベル別で異学年を排除せず報告する。
- 通常、TOFASのレベル1の出題範囲は「小2まで」。本調査限定で出題範囲を「小3まで」に調整している。それ以外のレベルでは調整はなく、通常のTOFASと同等の内容を出題している。
- 原則として、レベル1・2・4・5を受験。一部の国ではレベル3を受験しているが、レベル3の詳細は割愛する。

結果概要

1 計算力の実態（TOFAS）

8か国の小4・小5・中2・中3の計算テストの正答率と解答率を比較した。

日本の子どもは計算力が高い傾向にあった。しかし、日本を含めたすべての調査対象国で、苦手分野の克服や白紙率の低減に課題があることがわかった。

2 子どもの学習意識・習慣

10か国の小中学生に、計算方法・ICT端末の利用・宿題の重視・相談相手などを質問し、計算テストの正答率と比較した。

計算の自動化、ICT端末や宿題の活用、学外学習などが計算力に影響を与えている可能性が示唆された。

3 保護者と子どもの意識・関わり方

10か国の保護者に、計算力の重視・子どもの計算力の把握・テスト後の関わり方を質問し、子どもの回答や計算テストの正答率と比較した。

国によって保護者の意識に差があるほか、テスト後の保護者の関わり方と子どもの計算力に相関がある可能性が示された。

4 学校・先生の実教育環境

学校のICT・Wi-Fi・宿題・教員研修について、10か国の先生の回答を比較した。

日本では、それらはいずれも整備されているが、その整備状況が不十分な国もあることが明らかになった。

● 本速報における分析方針

- 本資料は速報値のため、アンケート結果は学年別の集計をしていない。国別かつ学年別の分析結果は今後の詳報版で報告を予定している。
- 本資料では、TOFASの結果概要およびアンケートの一部抜粋を報告している。子どものアンケートは全体で約50問あり、それぞれの回答については今後報告予定。
- 子どものアンケートについては、一部の設問は中学生のみを対象としている（小学生には質問していない）。
- アンケートと計算力の相関については、意識調査とTOFAS両方に回答があった回答者のみを対象としている。いずれか一方のみ回答した子どももいるため、合計値がNと一致しない場合がある。
- 本調査では、日本とそれ以外の調査国を一部の設問で比較している。本資料中で「日本以外」と単に記載している場合は、日本を除く調査対象の9か国（フィリピン・インドネシア・ベトナム・タイ・キルギス・ケニア・エジプト・モロッコ・ペルー）の単純合計を示す。
- 本報告書の集計時点では、フィリピンとモロッコはTOFASの受験結果が未回収のため、TOFASの結果には含まれない。TOFASの結果を含む資料中では、「日本以外」は日本とTOFAS未回収の2か国を除く7か国（インドネシア・ベトナム・タイ・キルギス・ケニア・エジプト・ペルー）の単純合計を示す。

計算力の国別比較・学年別比較

TOFAS受験者 N = 6,153

💡 国ごとの正答率に大きな差。学年別では単純な低下傾向は見られず。

当調査で利用した国際基礎学力検定TOFASの計算テストは、前の学年までに習った基本的な計算問題からなり、合格ラインは正答率80%である。しかし、8か国のうち半数以上の子どもが合格ライン（正答率80%）に到達しているのは3か国（ベトナムとキルギスと日本）のみであった。国毎の正答率は30%台から70%台と大きな開きがある。なお、日本の平均正答率は74.7%、合格率は54.4%で、比較的高いほうであった。

学年別では、単純な低下傾向は見られず、学年・国による差が複合的に反映されている。（小6、中1は一部の国のため参考値）

● 国際基礎学力検定TOFASの平均正答率ならびに合格率

図1-1 国別 TOFAS平均正答率・合格率

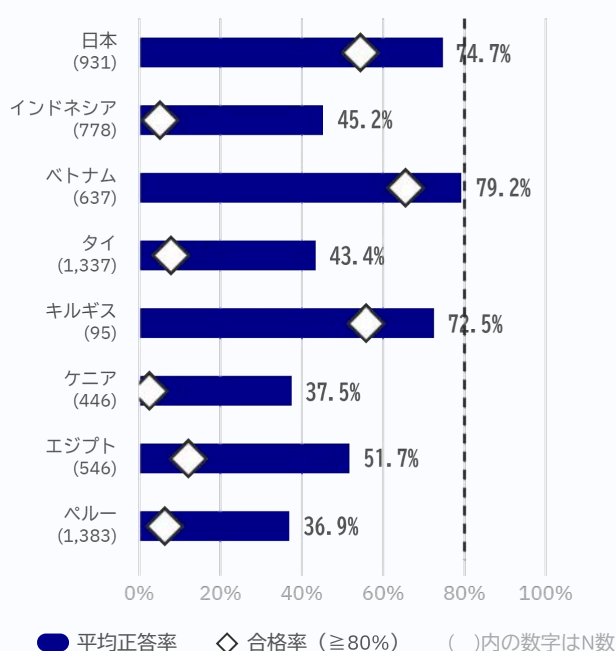
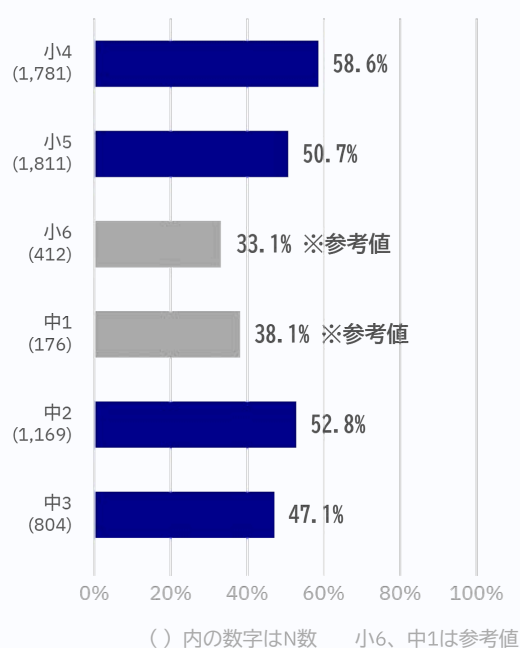


図1-2 学年別 TOFAS平均正答率



- 注1 国際基礎学力検定TOFASの詳細はP4「TOFASの特徴」参照。
- 注2 フィリピンとモロッコはTOFASの受験結果未回収のため、TOFASの結果に含まれない。

TOFASの学年別・分野別の正答率〈小4・小5〉

TOFAS受験者 レベル1〈小4相当〉 N = 1,197・レベル2〈小5相当〉 N = 1,555



分野によって正答率に大きな差。白紙率が3割を超える分野も。

計算テスト（国際基礎学力検定TOFAS）のレベル1〈小4相当〉とレベル2〈小5相当〉の分野別の正答率を示す。日本以外の7か国合計では、小4は「たし算」（正答率82.9%）が最高で「分数の加減」（同30.3%）が最低、小5は「たし算・ひき算」（同62.8%）が最高で「計算のきまり」（同26.2%）が最低。分野によって、小4では最大52.6ポイント、小5では最大36.6ポイントの大きな差が見られる。

正答率が低い分野では、白紙率（解答しなかった設問の割合）も高い傾向にある。日本以外の7か国合計では、小4の「分数の加減」（白紙率38.8%）と小5の「計算のきまり」（同35.2%）と、1/3以上が解答していない。

日本の子どもは、日本以外に比べて白紙率が低く、正答率が高い傾向にある。特に小4では「小数の加減」（正答率76.1%）を除くすべての分野で正答率が80%を超えている。しかしながら、小5の「計算のきまり」（同57.6%）は半数近くが正答できておらず、日本の小学生においても定着が不十分な分野があることがわかる。

図2-1 レベル1〈小4相当〉（出題数70）

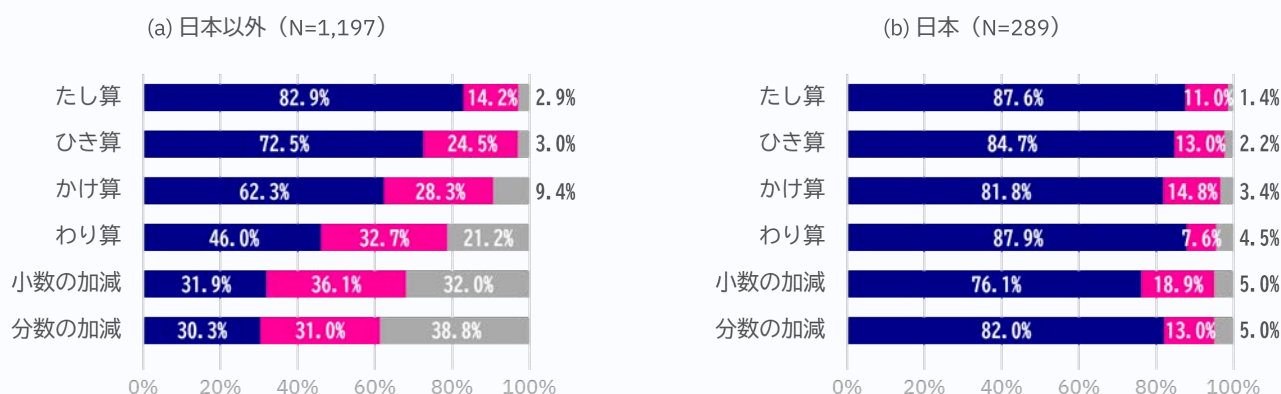
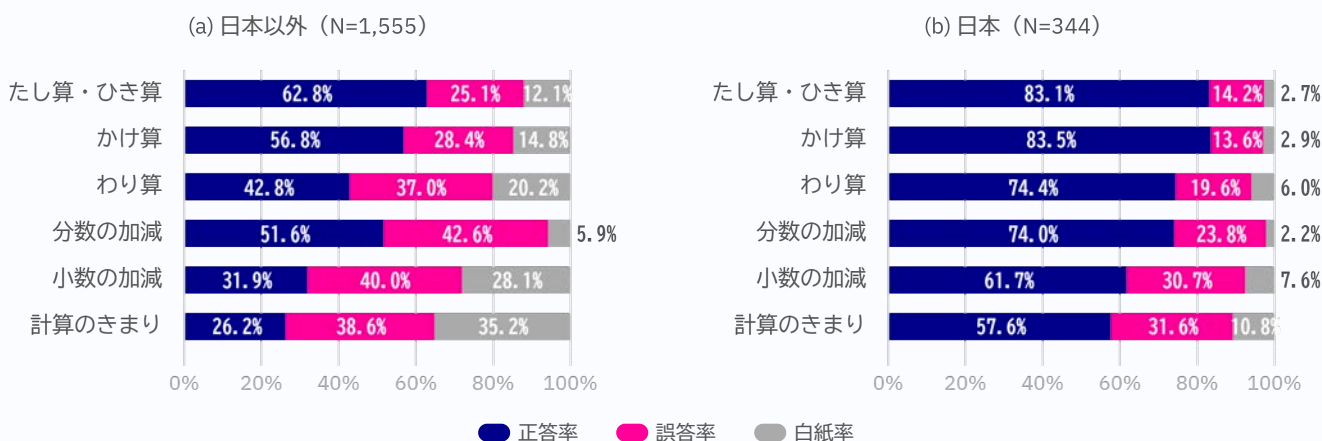


図2-2 レベル2〈小5相当〉（出題数70）



- 注1 国際基礎学力検定TOFASの詳細はP4「TOFASの特徴」参照。
- 注2 図2-1はTOFASのレベル1（小3までの範囲）、図2-2はレベル2（小4までの範囲）を受験した子どもの分野別正答率。原則的にそれぞれ各国の小4相当・小5相当が受験。
- 注3 TOFASのレベル1の出題範囲を、本調査限定で「小3まで」に調整。
- 注4 基本的に分野は出題順だが、小5の「分数の加減」は複数回登場している。
- 注5 「日本以外」は日本とTOFASの受験結果未回収の2か国を除く調査対象の7か国の単純合計（対象国はP5「本速報における分析方針」参照）。

TOFASの学年別・分野別の正答率〈中2・中3〉

TOFAS受験者 レベル4〈中2相当〉 N = 853・レベル5〈中3相当〉 N = 822

💡 日本以外の7か国合計では、どの分野も正答率80%に届かず。日本も中3の「連立方程式」で白紙率が高い。

計算テスト（国際基礎学力検定TOFAS）のレベル4〈中2相当〉とレベル5〈中3相当〉の分野別の正答率を示す。日本以外の7か国合計では、中2は「分数の乗除」（正答率67.1%）が最高で「方程式」（同35.7%）が最低、中3は「正負の数」（同62.8%）が最高で「連立方程式」（同33.5%）が最低。分野によって、中2では最大31.4ポイント、中3では最大29.3ポイントと大きな差が見られ、正答率が高い分野であっても合格ラインである正答率80%を超えていない。

正答率が低い分野では、白紙率（解答しなかった設問の割合）も高い傾向にある。日本以外の7か国合計では、中2の「方程式」（正答率35.7%・白紙率24.0%）と中3の「連立方程式」（正答率33.5%・白紙率30.7%）と、最後の分野は特に白紙率が高く、正答率が低い。

日本の子どもは、日本以外に比べて白紙率が低く、正答率が高い傾向にある。しかしながら、中3の「連立方程式」（正答率39.3%）は半数以上が正答できておらず、白紙率も高い（26.1%）。

図3-1 レベル4〈中2相当〉（出題数60）

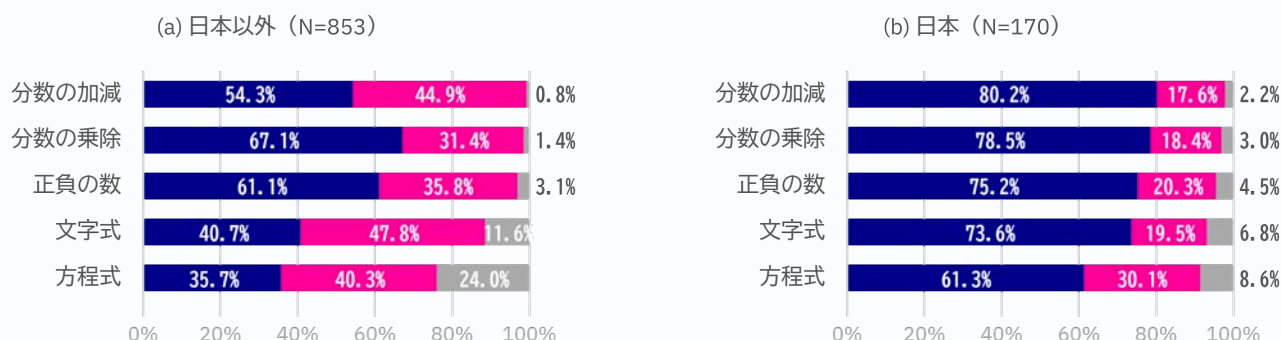
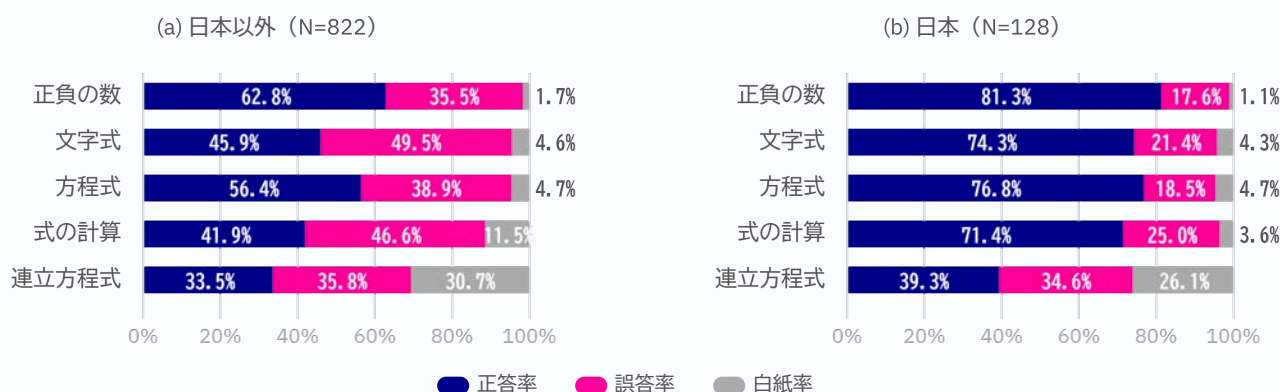


図3-2 レベル5〈中3相当〉（出題数60）



● 注1 国際基礎学力検定TOFASの詳細はP4「TOFASの特徴」参照。

● 注2 図3-1はTOFASのレベル4（中1までの範囲）、図3-2はレベル5（中2までの範囲）を受験した子どもの分野別正答率。原則的にそれぞれ各国の中2相当・中3相当が受験。

● 注3 「日本以外」は日本とTOFASの受験結果未回収の2か国を除く調査対象の7か国の単純合計（対象国はP5「本速報における分析方針」参照）。

TOFASの正答率と解答率の関係

TOFAS受験者 N = 6,153

💡 **正答率が高い子どもは解答率が高いが、解答率が高ければ正答率が高いとは言えない。日本は正答率も解答率も高い傾向。**

計算テスト（国際基礎学力検定TOFAS）の解答率（正答・誤答に関わらず、解答した設問の割合）に注目すると、日本以外の平均解答率は84.6%であった。

国別に見ると、TOFASの正答率が高い国ほど、解答率が高い傾向にある。最も解答率の平均が高い国はベトナムで99.0%。ベトナムは正答率も79.2%と高い。日本も、解答率が94.5%で正答率が74.7%といずれも高い水準にある。

正答率（上位・中位・下位）と解答率（高・中・低）の3区分に注目すると、解答率が低い子どもは正答率も低い傾向が明確に見られる。一方で、解答率が高くて正答率が50%を切っている生徒も少なくない。正答率が高い子どもは解答率が高いが、解答率が高ければ正答率が高いとは言えないようだ。

TOFASの合格正答率は80%だが、日本以外の7か国合計では、そもそも80%以上解答できていない「解答率：低（80%未満）」が30.6%（正答率中位3.3%+下位27.4%）存在し、合格率を押し下げる一因となっている。一方の日本は、「解答率：低（80%未満）」はわずか8.2%（正答率中位2.5%+下位5.7%）にとどまり、すべての問題を解ききり合格ラインに達した「正答率：上位（80%以上）かつ解答率：高（100%）」が47.6%と半数近くを占めている。日本の子どもたちは、他国に比べて「解くスピード」と「正確性」を高い水準で両立させていることがわかる。

図4-1 国別 TOFAS正答率・解答率（全体N=6,153）

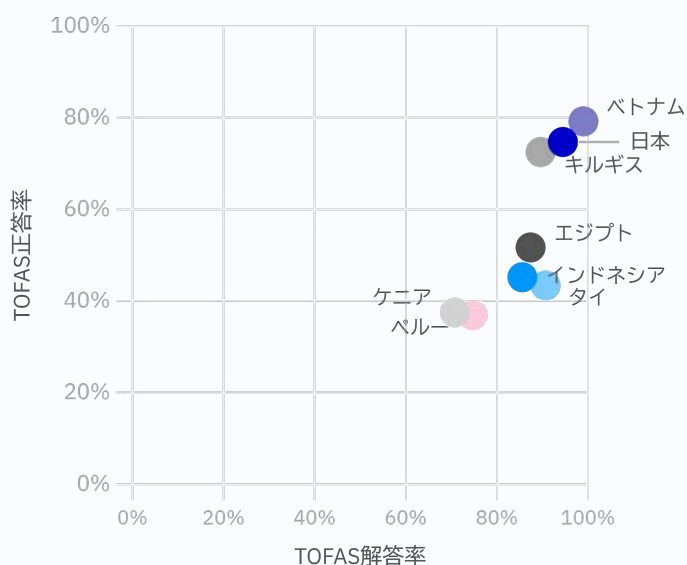
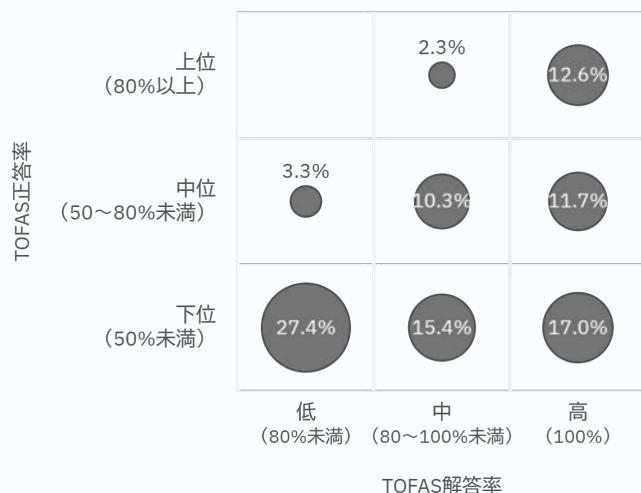


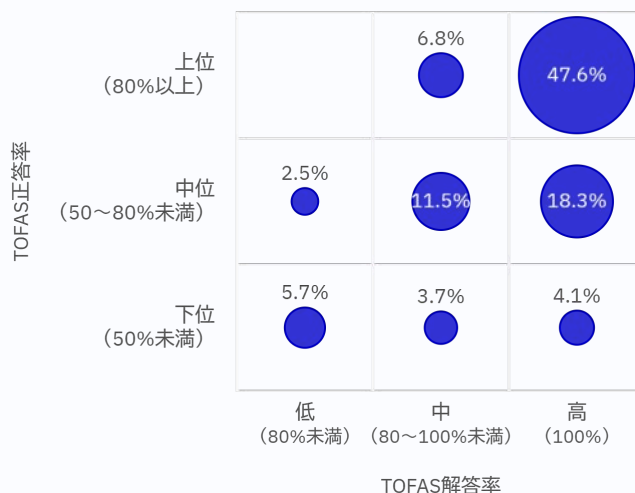
図4-2 正答率・解答率のバブル図

バブルの大きさ＝構成比 (%)

(a) 日本以外 (N=5,222)



(b) 日本 (N=931)



- 注1 国際基礎学力検定TOFASの詳細はP4「TOFASの特徴」参照。
- 注2 TOFASの正答率により、上位（80%以上）・中位（50～80%未満）・下位（50%未満）の3区分に、国や学年によらず分類した。
- 注3 TOFASの解答率を、高（100%）・中（80～100%未満）・低（80%未満）の3区分に、国や学年によらず分類した。
- 注4 「日本以外」は日本とTOFASの受験結果未回収の2か国を除く調査対象の7か国の単純合計（対象国はP5「本速報における分析方針」参照）。

計算方法と計算力の関係

子ども 全員 N = 6,313



「8+5」の答えが「すぐわかる」子どもは計算力が高い傾向。暗算ができていない子どもも。

「8+5」の計算方法について「頭の中で答えがすぐにわかる」と日本以外の9か国合計では小学生が33.3%、中学生が49.4%が回答した。小学生では「指を使って数える」「紙に書いて計算する」の合計45.3%と、暗算ができていない小学生が半数近くいた。しかし中学生では26.3%（指を使う13.6%＋紙に書く12.7%）と、学年が上がると計算の自動化が進んでいることが示唆される。日本は「頭の中ですぐわかる」と小学生の62.8%が回答しており、小学生の時点ですでに半数以上が計算の自動化が進んでいた。

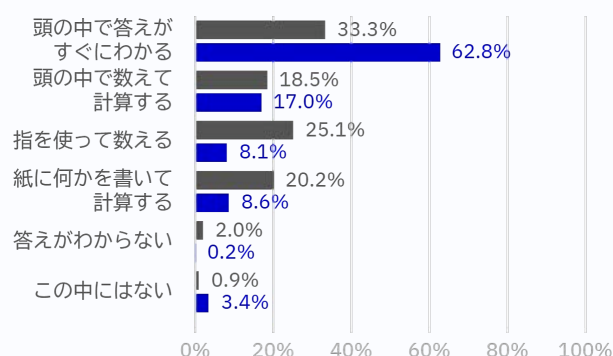
計算テストの成績で比較をすると、日本を含めた8か国合計（TOFASの受験結果未回収の2か国を除く）の計算力上位（TOFASの正答率80%以上）では69.0%が「頭の中ですぐわかる」と回答したのに対し、計算力下位（同50%未満）では30.5%にとどまる。一方「指を使う」「紙に書く」と回答した子どもは、計算力上位15.6%・計算力下位45.4%と、計算力に差がついた。同じ傾向は解答率の高さにも見られ、計算の自動化が計算テスト全体に及ぼす影響の高さがうかがえる。

Q あなたは「8+5」をどうやって計算しますか？ もっともあてはまるものを1つだけ選んでください。

図5-1 日本以外・日本

● 日本以外 ● 日本

(a) 小学生（日本以外 N=3,091・日本 N=559）



(b) 中学生（日本以外 N=2,392・日本 N=271）

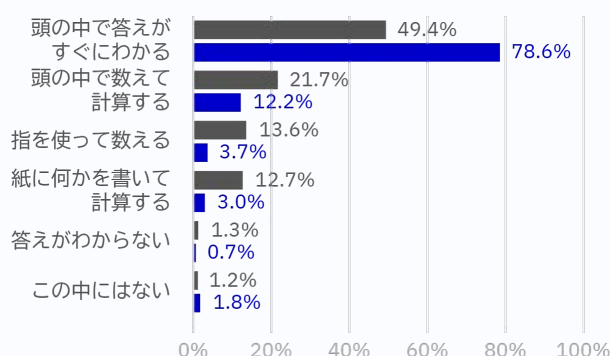


図5-2 計算力別（上位N=1,161・中位N=1,363・下位N=2,555）

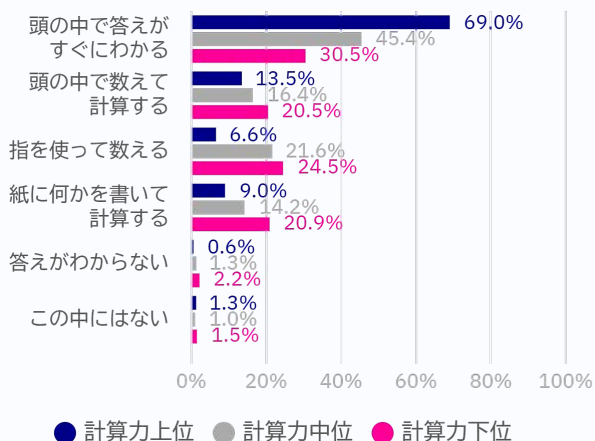
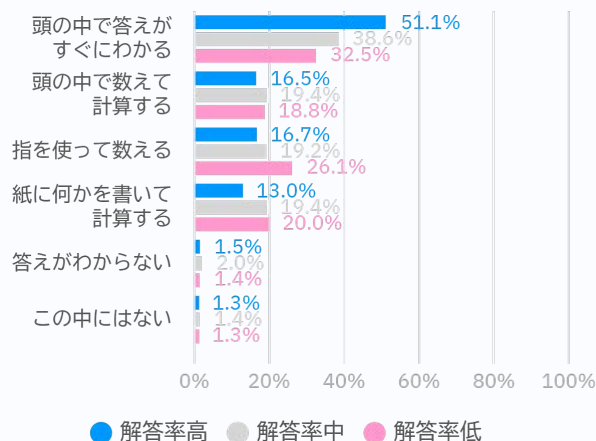


図5-3 TOFAS解答率別（高N=2,516・中N=1,316・低N=1,247）



- 注1 計算力は、TOFASの正答率で上位・中位・下位の3区分に分類。国際基礎学力検定TOFASの詳細はP4「TOFASの特徴」参照。
- 注2 解答率はTOFASの解答率で、高・中・低の3区分に分類。
- 注3 小学生は原則として小4・小5。中学生は原則として中2・中3。タイの小6、インドネシアとモロッコの中1も含む。
- 注4 並び順は全体（全学年）の回答率の降順。
- 注5 「日本以外」は日本を除く調査対象の9か国の単純合計（対象国はP5「本速報における分析方針」参照）。

授業でのICT機器の利用頻度

子ども 全員 N = 6,313

💡 日本以外ではICTを使う算数・数学の授業が「ほとんどない」「全くない」子どもが6割以上。

算数・数学の授業でスマートフォン・タブレット・コンピューターを使う頻度について10か国の小中学生に質問した。日本以外の9か国合計では、月に何回か以上使うと回答した子どもは37.2%にとどまる。日本では月に何回か以上が47.8%と約半数であった。ただし「ほとんど毎日」は6.6%と日本以外（16.8%）を下回っており、算数・数学の授業では、ICT端末は時折利用する形が日本では主流であることがうかがえる。

計算テストの成績で比較をすると、計算力上位（TOFASの正答率80%以上）の47.5%が月に何回か以上利用しているのに対し、計算力下位（同50%未満）では37.8%と利用頻度が低い。さらに「全くない」では計算力上位17.5%に対し下位35.7%と大きな差があり、ICT機器を使う授業が全くない環境では、計算力が低い傾向にあった。ただし、ICT機器を使った授業の有無は、国や自治体の教育への投資を反映している可能性もあり、直接的にICT機器が影響を与えているかどうかはこの調査からは言うことができない。

Q スマートフォン、タブレット、コンピューターを使う算数・数学の授業はどの程度ありますか。もっともあてはまるものを1つだけ選んでください。

図6-1 日本以外・日本

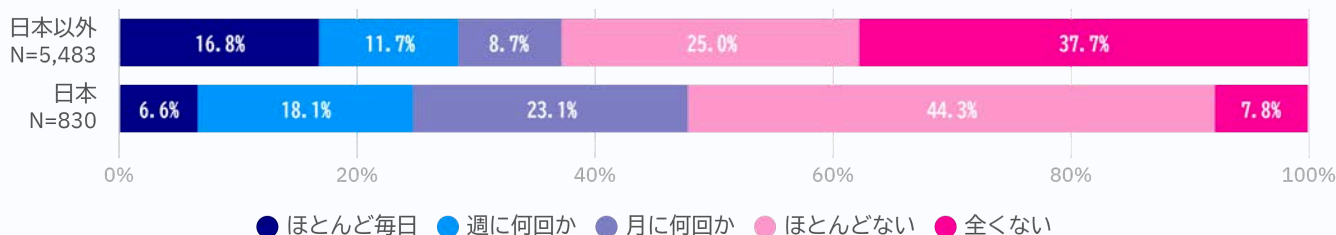
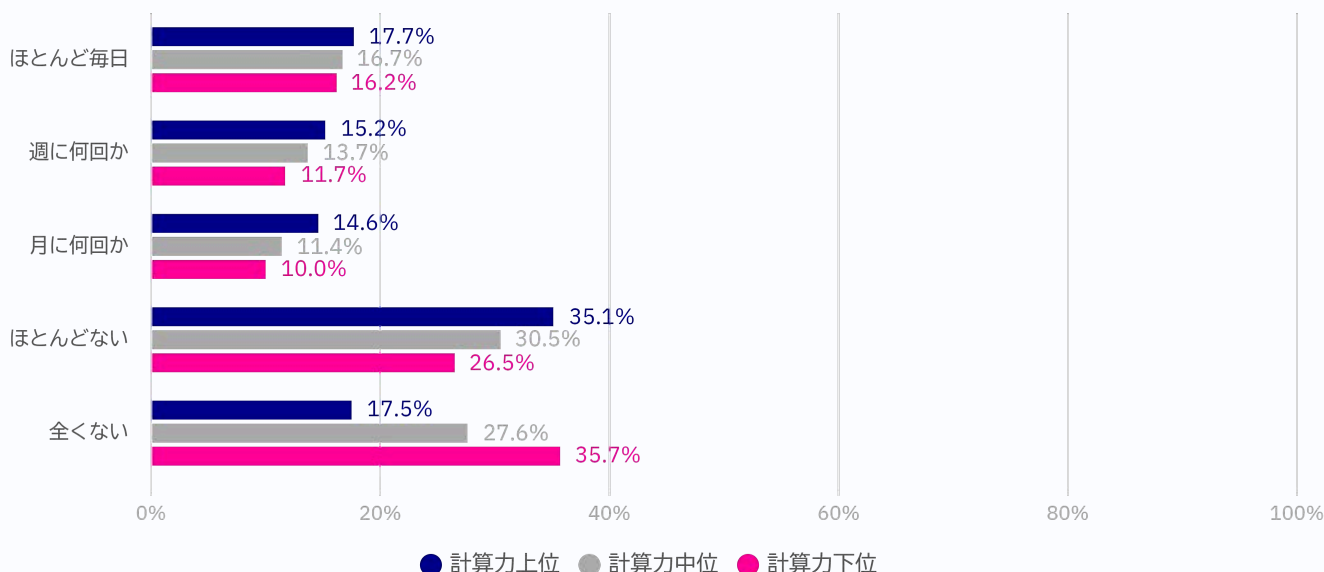


図6-2 計算力別（上位N=1,161・中位N=1,363・下位N=2,555）



● 注1 計算力は、TOFASの正答率で上位・中位・下位の3区分に分類。国際基礎学力検定TOFASの詳細はP4「TOFASの特徴」参照。

● 注2 「日本以外」は日本を除く調査対象の9か国の単純合計（対象国はP5「本速報における分析方針」参照）。

宿題の重要性とその理由

子ども 宿題が出ている人 N = 6,096

💡 8割の子どもが「宿題は役立っている」と実感。計算力が高い子どもは「宿題で自分の弱点がわかる」「次の授業の準備になる」と答える傾向。

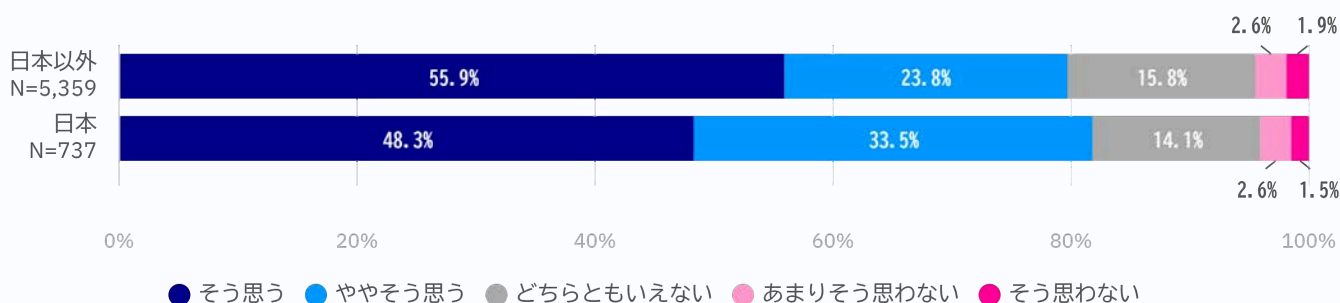
算数・数学の宿題について、日本以外の9か国合計の子どもの79.7%、日本の子どもの81.8%が役立っていると回答した（「思う」と「やや思う」の合計）。

宿題が役立っている理由は「学んだことを見直すことができる」が最多であった。他にも、「自分の弱いところ分かる」（計算力上位・TOFASの正答率80%以上で46.7%）と「次の授業の準備になる」（同47.7%）で計算力が高い層ほど回答が多く、宿題の活用方法の違いが計算力と相関がある可能性がうかがえる。

Q 学校の算数・数学の宿題は、あなたが授業を理解するためや成績を上げるために役立っていると思いますか。もっともあてはまるものを1つだけ選んでください。

（宿題が学校で出ていると回答した生徒のみ）

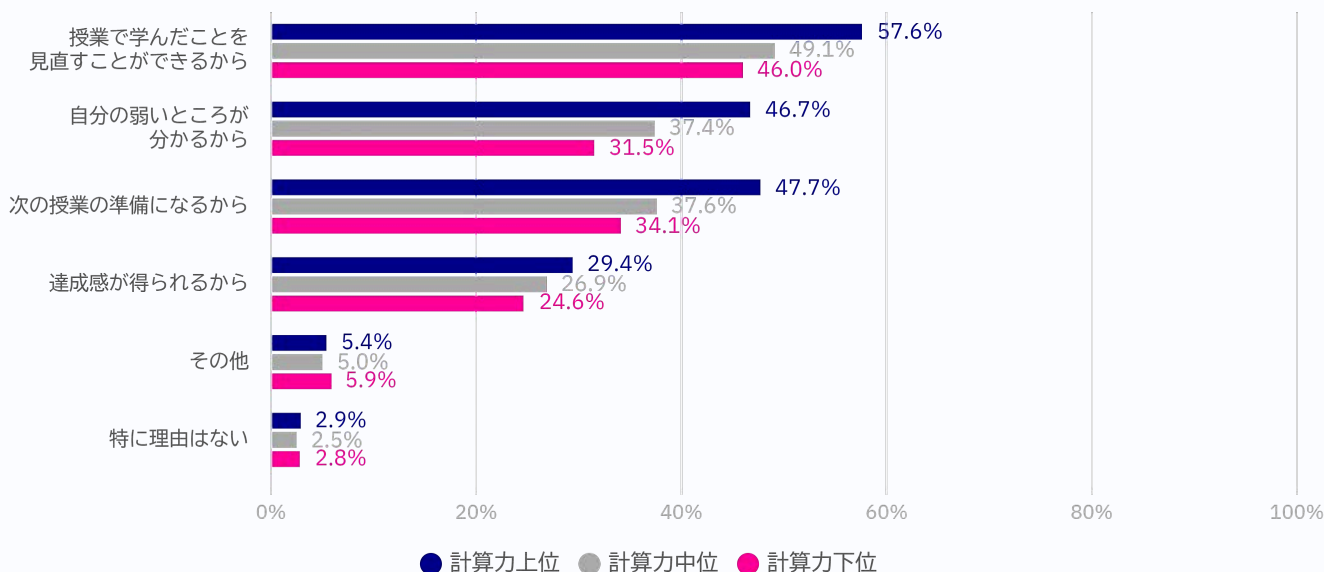
図7-1 日本以外・日本



Q なぜ学校の算数・数学の宿題は、役立っていると思いますか。あてはまるものをすべて選んでください。

（前の質問でそう思う、やや思うと回答した生徒のみ）

図7-2 計算力別（上位N=944・中位N=1,025・下位N=1,853）



注1 計算力は、TOFASの正答率で上位・中位・下位の3区分に分類。国際基礎学力検定TOFASの詳細はP4「TOFASの特徴」参照。

注2 「日本以外」は日本を除く調査対象の9か国の単純合計（対象国はP5「本速報における分析方針」参照）。

勉強に関する質問相手

子ども 中学生 N = 2,632

💡 勉強でわからないことがあったときは「クラスメートに相談」が最多。塾の先生に相談する子どもの計算力が高い傾向。

算数・数学の勉強でわからないことがあったときどうするかを10か国の中学生に質問した。日本以外の9か国合計でも日本でも「クラスメート」が最も多い結果となったが、日本以外では43.8%に対し、日本では78.6%と特に多く、日本では同級生と学びあう姿勢が築かれていることが示唆された。

計算テストの成績で比較をすると、計算力上位（TOFASの正答率80%以上）では「塾の先生」を選ぶ割合が27.6%と、計算力下位（同50%未満）の13.7%を大きく上回っている。塾などの学外の学習資源を利用できるかどうか、またそれを活用してわからない点を解消できているかどうか、計算力の定着度に関連している可能性がある。

Q 算数・数学の勉強でわからないことがあったとき、誰に質問をしましたか。あてはまるものをすべて選んでください。

図8-1 日本以外（N=2,361）・日本（N=271）

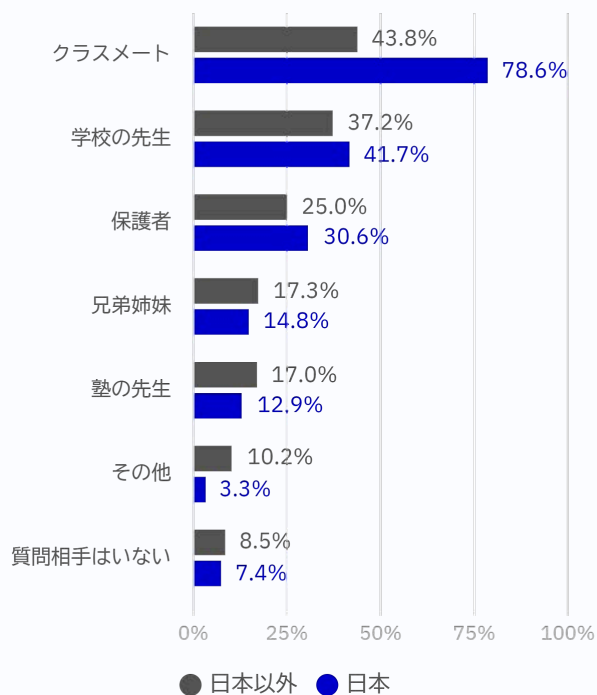
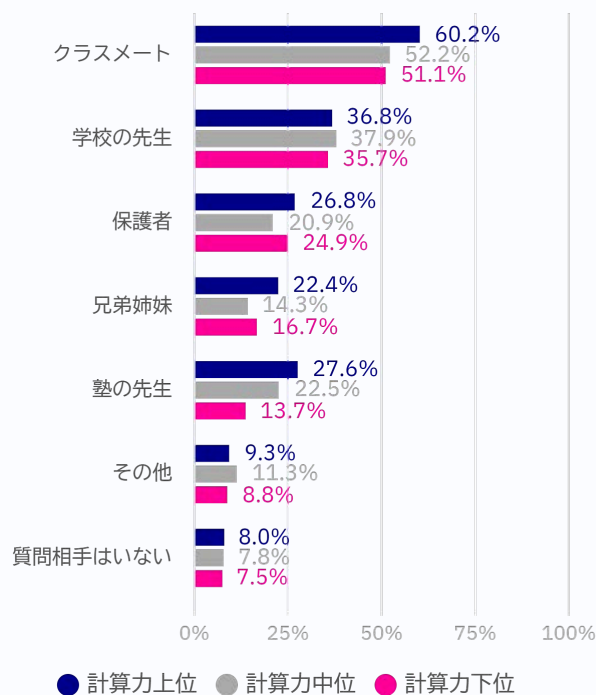


図8-2 計算力別（上位N=410・中位N=435・下位N=975）



● 注1 計算力は、TOFASの正答率で上位・中位・下位の3区分に分類。国際基礎学力検定TOFASの詳細はP4「TOFASの特徴」参照。

● 注2 「日本以外」は日本を除く調査対象の9か国の単純合計（対象国はP5「本速報における分析方針」参照）。

保護者と子どもの「計算力は重要」の認識

子ども TOFAS受験者 / 保護者 全員 子ども N = 5,735 保護者 N = 3,163

💡 子ども・保護者とも、7割超が「計算力は重要」と回答。ただし国によって意識の差も。

「計算力は重要か」という質問に対して、10か国全体では子どもの79.4%、保護者の84.4%が重要だと回答した（「そう思う」と「ややそう思う」の合計）。

日本は子ども82.0%、保護者82.2%と全体と同程度の約8割が「計算力は重要だ」と回答した。日本以外の国でも「計算力は重要だ」と回答する方が多数派だが、肯定率は子どもは67.7%から93.4%、保護者は56.6%から98.8%と国による差は大きい。

Q TOFASは正答率80%で合格です。今回の計算テストの結果とは関係なく、あなたにとって（子）／お子さまにとって（保護者）、このテストに合格できるレベルの計算能力は、重要だと思いますか？

図9-1 全体

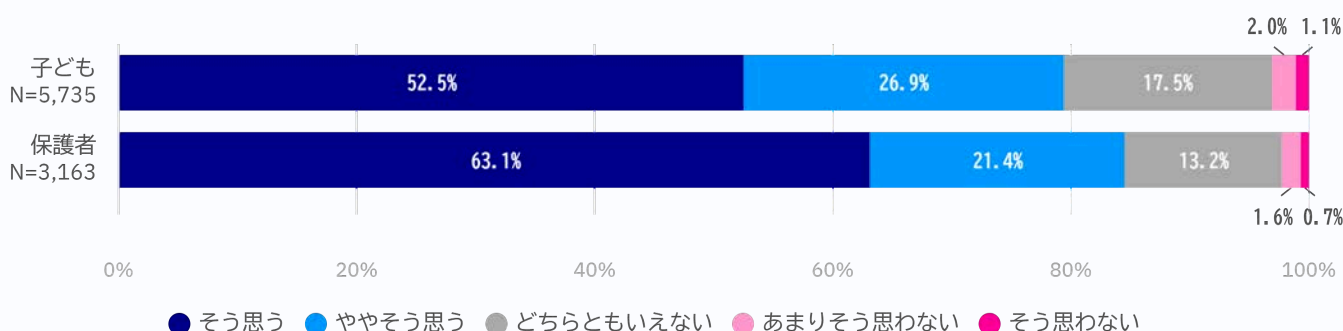
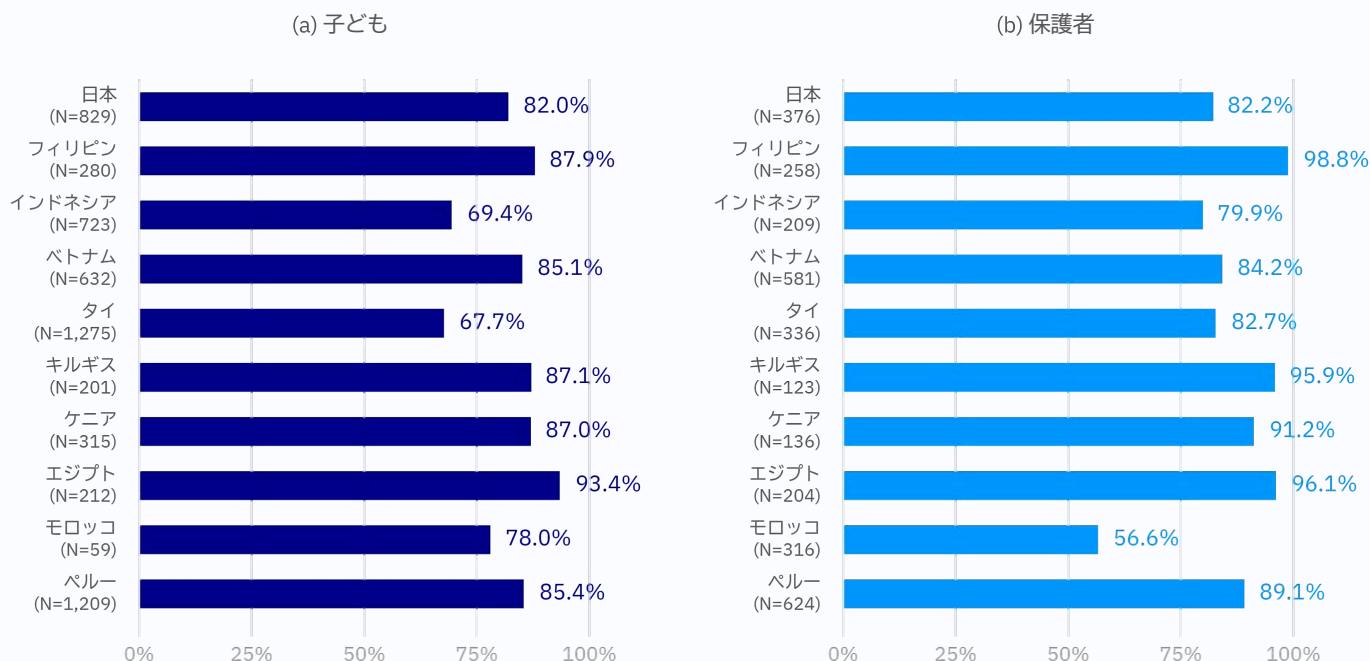


図9-2 国別肯定率（「そう思う」と「ややそう思う」の合計）



- 注1 子どもには「今回受けた計算テストは、今の学年までに学校で習った計算問題です。」と前置きして質問しました。
- 注2 保護者には「あなたのお子様は、学校でTOFASという計算テストを受験しました。TOFASは、お子様の学年までに学習した計算問題が出題されるテストです。先ほどの質問では、TOFASというテストの参考として、小学4年生レベルおよび中学2年生レベルの例題をご覧くださいました。受験者は約60問のテストを40分間で解きます。」と前置きして質問しました。
- 注3 当該の設問では『今回TOFASを受験した』と回答した人を対象に質問している。9/1時点では受験結果を回収できていない生徒も含む。

TOPIC
10

保護者と子どもの計算力の自己評価

子ども 全員 / 保護者 全員 子ども N = 6,313 保護者 N = 3,163

💡 子ども・保護者ともに自己評価では半数以上が「計算が得意」と回答。8割を超える国も。

自分自身や自分の子どもの計算力に関して、10か国全体では子どもの54.4%、保護者の55.0%が、子どもは同学年の他の子どもたちと比べて計算が得意だと認識していた（「そう思う」と「ややそう思う」の合計）。

日本は子ども41.7%・保護者35.9%と、「計算が得意」とする回答は他の国に比べてやや控えめであった。最も肯定率が高いのは、子どもではエジプトの86.4%、保護者ではキルギスの82.9%であった。

ただし、必ずしも「計算が得意」とする回答が高いほうが良いとも言えない。過剰な自信は客観的に計算力を把握できていないためである可能性もある。今後、実際のTOFASの正答率や合格率と比較して分析する予定だ。

Q 子ども：同じ学年の他の生徒に比べて、あなたは計算が得意だと思いますか。 保護者：あなたのお子様は、同学年の他の子どもたちと比べて、算数・数学の計算が得意だと思いますか？ もっともあてはまるものを1つだけ選んでください。

図10-1 全体

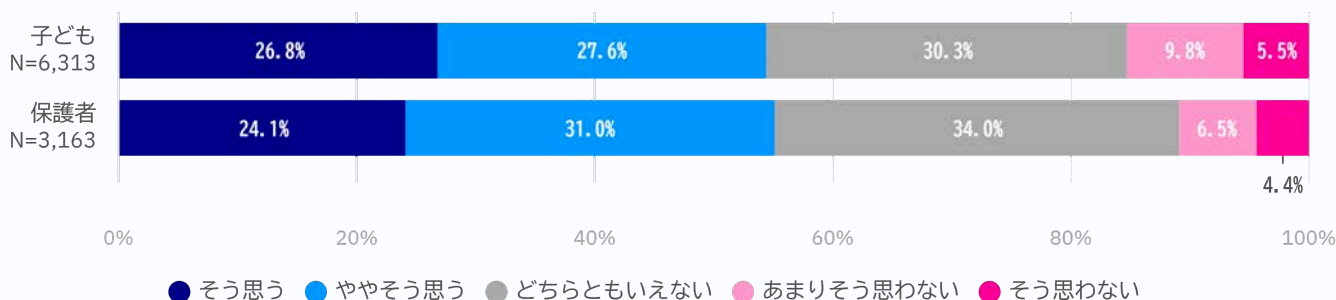
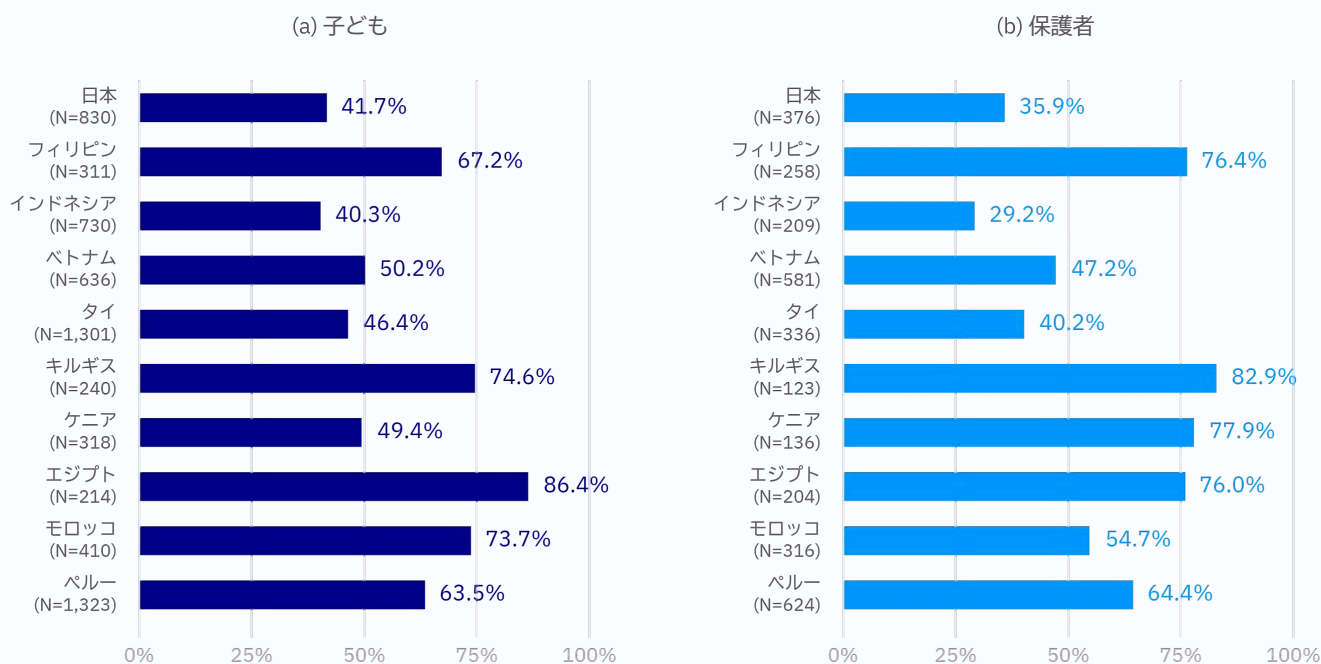


図10-2 国別肯定率（「そう思う」と「ややそう思う」の合計）



テストへの保護者の対応〈良い成績の時〉

保護者 全員 N = 3,163

💡 良い成績の時は、「努力を褒める」が最多、日本は「よくできたねと伝える」も多い。計算力が高い子の親ほど「結果を褒める」割合が高い。

子どもが良い成績を取ったときの保護者の対応を質問し、子どもの計算力と比較した。

日本以外の9か国合計では「次回も頑張ろう励ます」（56.1%）と「努力を褒める」（55.6%）が多い。日本は「努力を褒める」（66.8%）や「よくできたねと伝える」（63.0%）は日本以外よりも多い一方で「次回も頑張ろう励ます」（41.0%）は日本以外（56.1%）よりも少なく、努力や結果を褒める傾向が示された。

子どもの計算テストの成績（正答率80%以上を計算力上位、50%未満を計算力下位）で比較をすると、日本を含めた8か国合計（TOFASの受験結果未回収の2か国を除く）では「結果を褒める」（計算力上位52.2%、下位39.6%）が最も計算力の差が大きく、「次回も頑張ろう励ます」（同59.1%、59.1%）よりも効果的な声掛けである可能性が示唆された。

Q お子様が算数・数学のテストで良い成績を取った時、どのように対応しますか？ あてはまるものをすべて選んでください。

図11-1 日本以外（N=2,787）・日本（N=376）

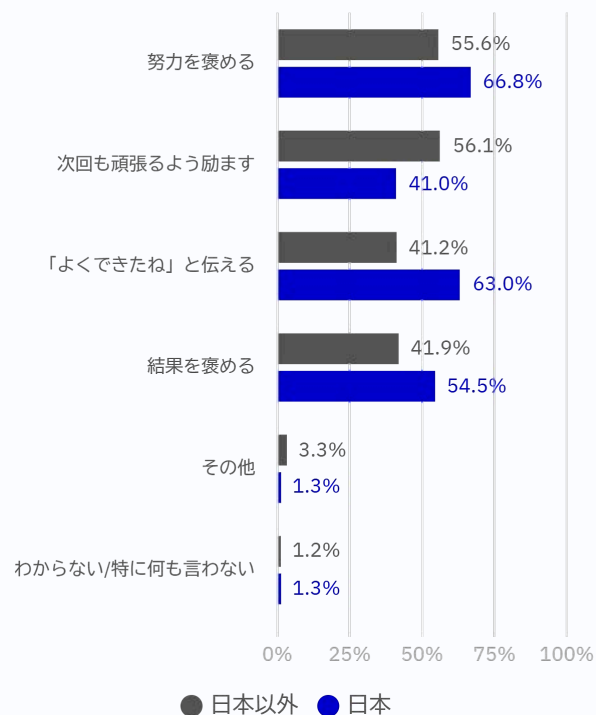
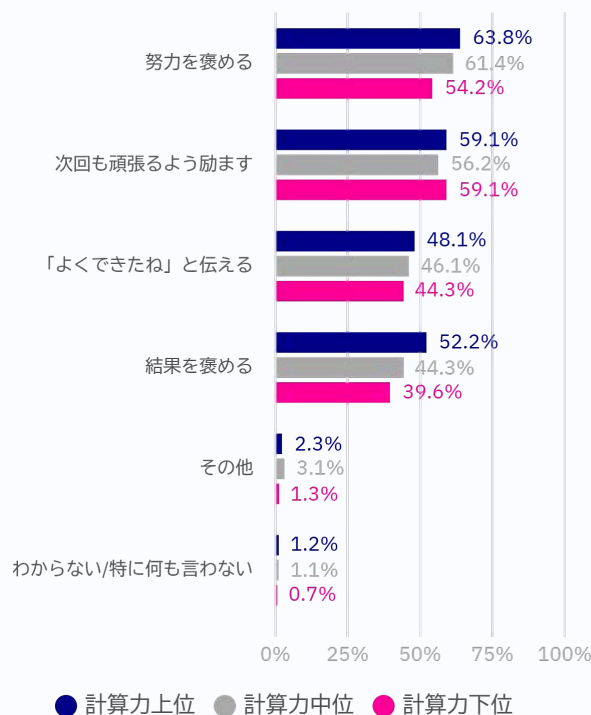


図11-2 計算力別（上位N=682・中位N=612・下位N=990）



- 注1 計算力は、回答者の子どものTOFASの正答率で上位・中位・下位の3区分に分類。国際基礎学力検定TOFASの詳細はP4「TOFASの特徴」参照。
- 注2 計算力上位/中位/下位は、回答者の子どもがTOFASを受験している場合に集計した。
- 注3 「日本以外」は日本を除く調査対象の9か国の単純合計（対象国はP5「本速報における分析方針」参照）。

テストへの保護者の対応〈良くない成績の時〉

保護者 全員 N = 3,163

💡 **良くない成績の時、日本以外は「次はできるよと励ます」、日本は「間違えた問題の解き方を教える」が最多。計算力が高い子の親ほど「次への取り組みを一緒に考える」割合が高い。**

子どもが良くない成績を取ったときの保護者の対応を質問し、子どもの計算力と比較した。

日本以外の9か国合計では「次はできるよと励ます」（60.6%）が最も多いが、日本では22.6%にとどまる。日本では「間違えた問題の解き方を教える」（53.5%）が最多であった。

しかしこれは、適切な関わりである可能性がある。子どもの計算テストの成績（正答率80%以上を計算力上位、50%未満を計算力下位）で比較をすると、「次はできるよと励ます」（計算力上位55.3%・下位62.5%）はむしろ計算力が低い子の親ほど多い傾向にあった。ただし、「間違えた問題の解き方を教える」（同45.3%、42.8%）はあまり計算力の差はなく、最も計算力の差があったのは「次のテストに向けて子どもと話し合う」（同46.5%、27.6%）であった。計算力の高い子どもの保護者ほど、次につなげる関わり方をしている傾向がある。

Q お子様は算数・数学のテストで良くない成績を取った時、どのように対応しますか？ あてはまるものをすべて選んでください。

図12-1 日本以外 (N=2,787)・日本 (N=376)

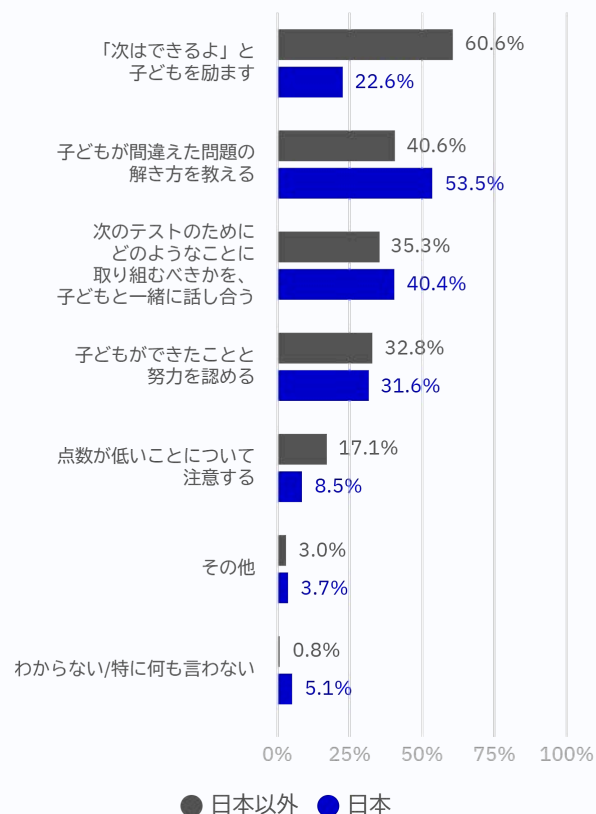
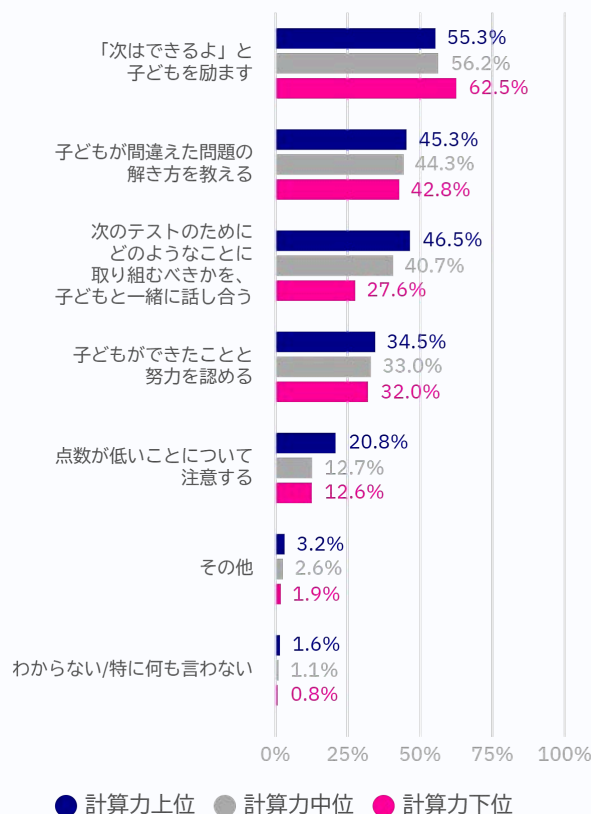


図12-2 計算力別（上位N=682・中位N=612・下位N=990）



- 注1 計算力は、回答者の子どものTOFASの正答率で上位・中位・下位の3区分に分類。国際基礎学力検定TOFASの詳細はP4「TOFASの特徴」参照。
- 注2 計算力上位/中位/下位は、回答者の子どもがTOFASを受験している場合に集計した。
- 注3 「日本以外」は日本を除く調査対象の9か国の単純合計（対象国はP5「本速報における分析方針」参照）。

学校内のICT端末の整備状況

先生 全員 N = 136

💡 児童・生徒が使えるICT端末は「共用」が最多で62.3%。使える端末が一切ないという回答も2割を超える。電子黒板やプロジェクターは半数以上が利用可能と回答。

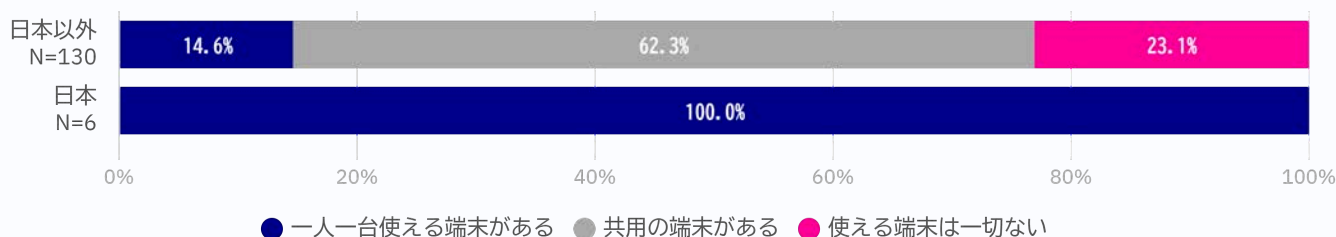
学校で児童・生徒が授業に使えるコンピュータやタブレット端末の配備状況を10か国の先生に質問したところ、日本以外の9か国合計では「一人一台ではないが、授業で使える共用の端末がある」が62.3%で最も多く、「児童・生徒が一人一台使える端末がある」は14.6%にとどまった。一方で「児童・生徒が使える端末は一切ない」も23.1%あり、端末を使える環境が整っていない学校が少なくない。

また、学校内で先生が使用できるICT端末について質問したところ、日本以外の9か国合計では電子黒板（64.6%）とプロジェクター（55.4%）が多く、デスクトップパソコン（47.7%）と続く。一方、タブレット（18.5%）やノートパソコン（36.2%）は少ない。

日本においては、回答数が少なく学校に偏りがあるので参考値ではあるが、児童・生徒が使えるICT端末についてはすべての先生が「児童・生徒が一人一台使える端末がある」と回答した。一方で先生用の端末については、すべての先生がタブレットを利用可能である一方、電子黒板やデスクトップパソコンの利用は少ない。

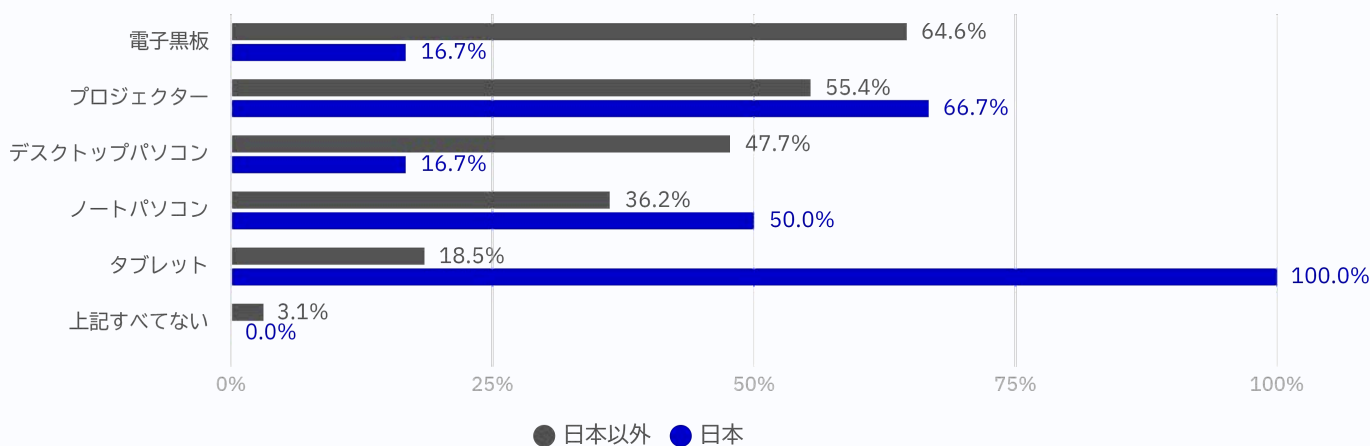
Q あなたの学校では、児童・生徒が授業で利用できるコンピュータやタブレット端末は配備されていますか？ あてはまるものを1つだけ選んでください。

図13-1 日本以外・日本



Q あなたの学校の先生が、校務や授業で利用できるICT機器を教えてください。あてはまるものをすべて選んでください。

図13-2 日本以外（N=130）・日本（N=6）



注1 1つの学校につき0～数名の数学の先生が回答。割合は参考値。

注2 「日本以外」は日本を除く調査対象の9か国の単純合計（対象国はP5「本速報における分析方針」参照）。

学校内のWi-Fiの整備状況

先生 全員 N = 136

💡 Wi-Fiが完備されているという回答は半数を下回る。学校内では利用できないと回答した先生も。

学校内のWi-Fiの整備状況について10か国の先生に質問したところ、日本以外の9か国合計では「ほぼすべての教室でWi-Fiを使用できる」が40.0%、「職員室やPC教室など、一部のエリアでのみWi-Fiを使用できる」が54.6%で拮抗した。まったく使えないと回答した先生も5.4%いる。

国別にみると、回答数が少なく学校に偏りがあるので参考値ではあるが、日本とケニアでは「ほぼすべての教室でWi-Fiを使用できる」と回答する一方で、フィリピンでは「Wi-Fiをまったく使用できない」が20.0%と、国による差も大きい。また、エジプト、モロッコ、ペルーでは「ほぼすべての教室でWi-Fiを使用できる」「Wi-Fiをまったく使用できない」の両方回答されており、学校によって整備状況に差がある国もあるようだ。

Q あなたの学校では、校務や授業で利用できるWi-Fi環境は整備されていますか？ あてはまるものを1つだけ選んでください。

図14-1 日本以外・日本

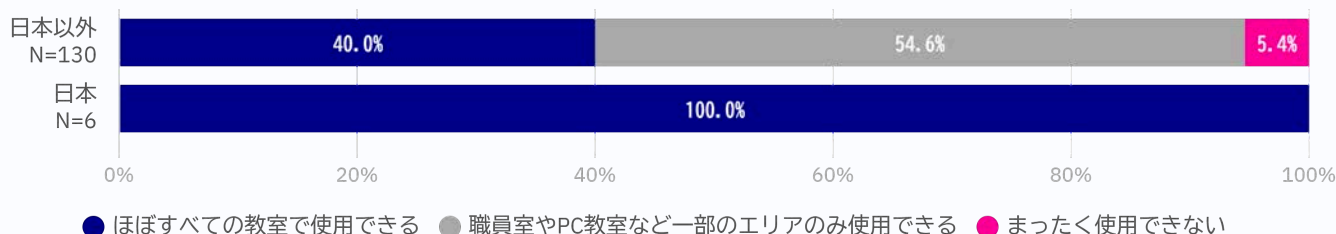
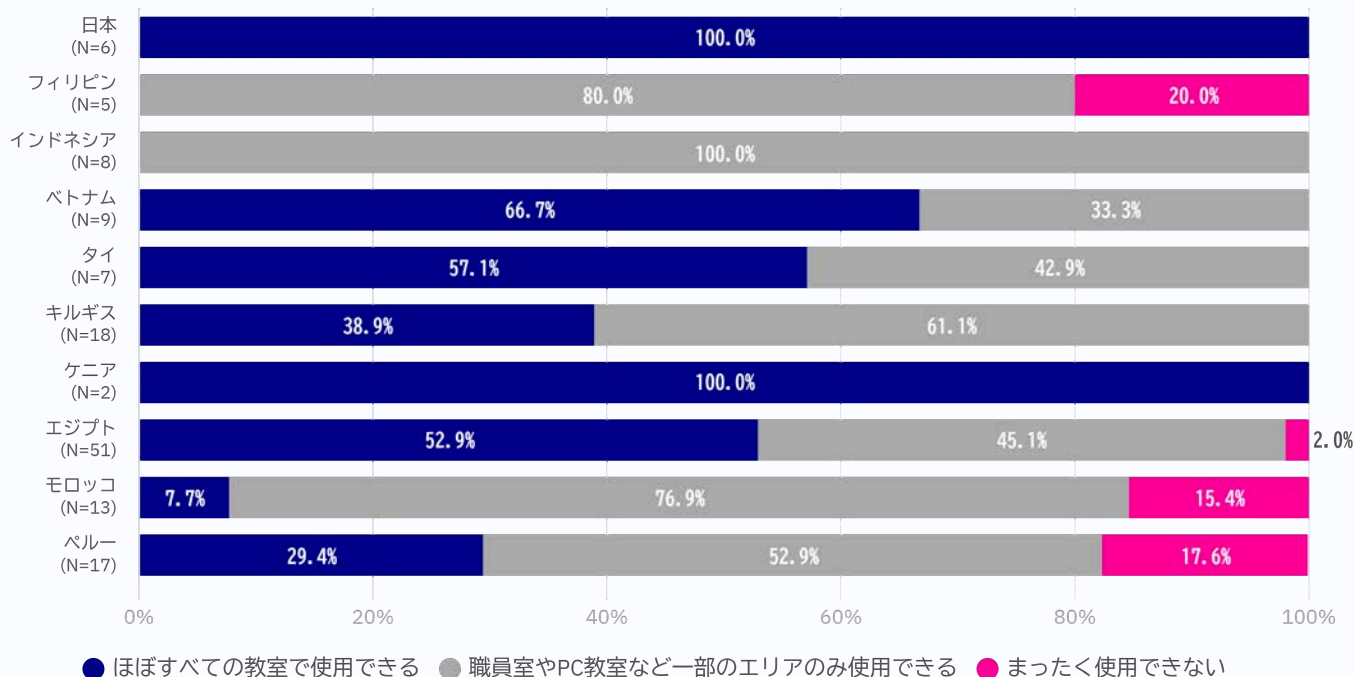


図14-2 Wi-Fi整備状況（国別）



● 注1 1つの学校につき0～数名の数学の先生が回答。割合は参考値。

● 注2 「日本以外」は日本を除く調査対象の9か国の単純合計（対象国はP5「本速報における分析方針」参照）。

宿題を課す頻度と、生徒が宿題を提出する頻度

先生 全員 N = 136

💡 日本以外は8割以上の先生がほぼ毎回宿題を課す。子どもも大半が課された宿題を提出している。

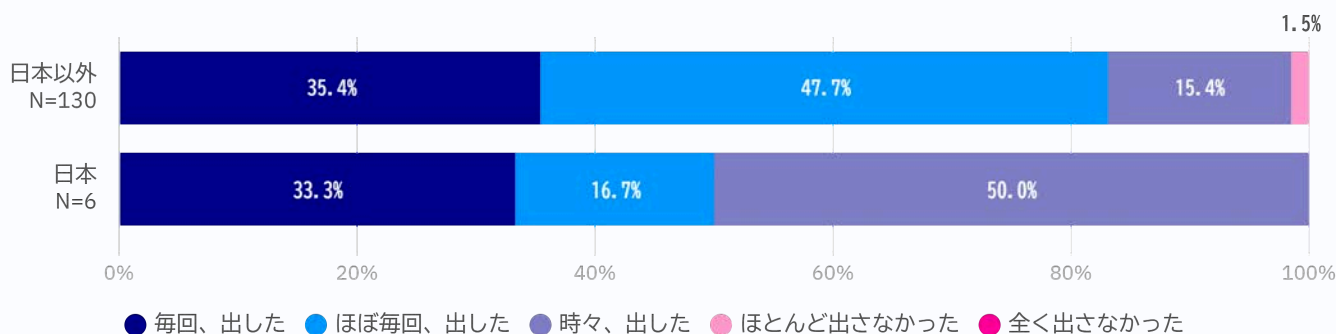
宿題を課した頻度を10か国の先生に質問したところ、日本以外では83.1%の先生がほぼ毎回以上と回答した（「毎回」と「ほぼ毎回」の合計）。

子どもが宿題を提出した割合を質問すると、日本以外では75.0%の先生が7割以上の子どもが宿題を提出していると回答した（「90%以上」と「70%以上90%未満」の合計）。日本以外の国では、宿題をほぼ毎日出し、生徒の大半が提出する状況ができているようだ。

一方の日本は、回答数が少なく学校に偏りがあるので参考値ではあるが、宿題を課した頻度は「時々」が半数、ほぼ毎回以上が半数であった。子どもの宿題の提出状況は「70%以上90%未満」が最多で、日本においては先生・生徒の両方において宿題の実施状況にばらつきがある可能性がある。

Q 前の学期中、授業後、どのくらいの頻度で宿題を出しましたか？ あてはまるものを1つだけ選んでください。

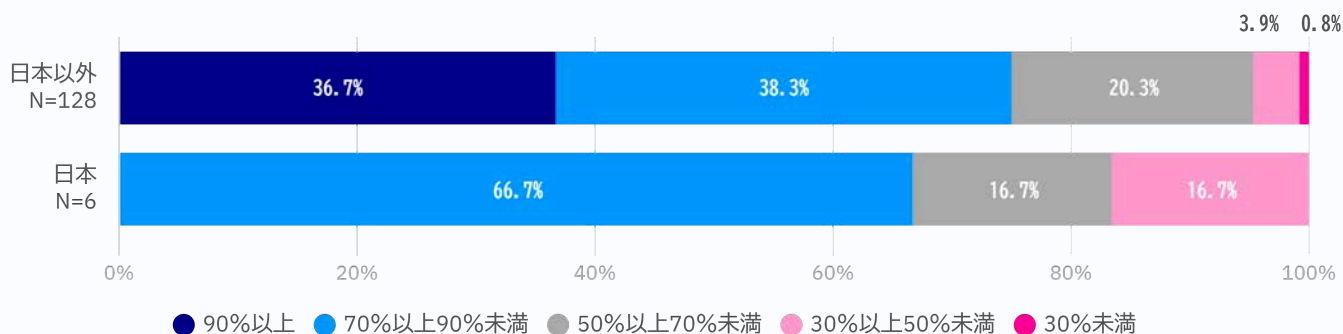
図15-1 日本以外・日本



Q 平均して、何パーセントの児童・生徒が宿題を提出しましたか？ あてはまるものを1つだけ選んでください。

（前の質問で「全く出さなかった」「ほとんど出さなかった」と回答した先生を除く）

図15-2 日本以外・日本



注1 1つの学校につき0～数名の数学の先生が回答。割合は参考値。

注2 「日本以外」は日本を除く調査対象の9か国の単純合計（対象国はP5「本速報における分析方針」参照）。



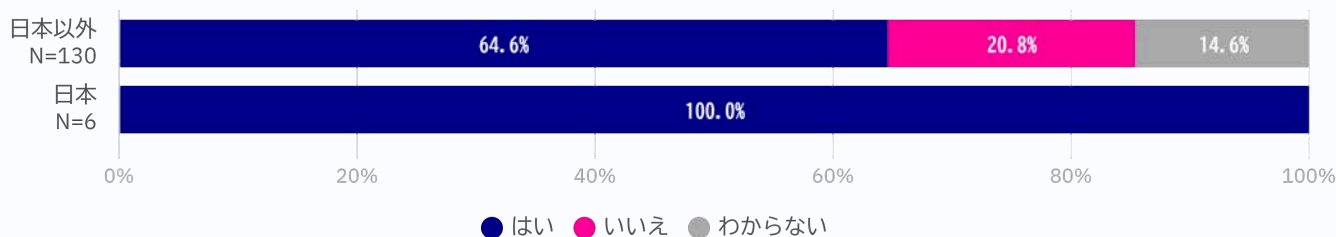
研修制度があると答えた先生は約3人に2人。制度があっても参加回数は年1～2回が最多。

先生の授業の質を向上させるための研修やセミナーの制度があるかどうか、10か国の先生に質問した。研修やセミナーの制度が「ある」（はい）と回答した先生は日本以外の9か国合計で64.6%であった。制度が「ある」と回答した先生のうち、昨年度の参加回数は「1～2回」が最多であった。

回答数が少なく学校に偏りがあるので参考値ではあるが、日本はすべての先生が「制度があり、1～2回参加した」と回答した。その他の国では、キルギスで3回以上参加した先生の割合が最も高い（66.7%）。制度が無いという回答はペルーが最多で58.8%であった。制度の有無だけでなく、実際に参加できているかどうかにも国による差がある。

Q あなたの自治体（国または地域）には、先生の授業の質を向上させるための研修やセミナーの制度がありますか？ あてはまるものを1つだけ選んでください。

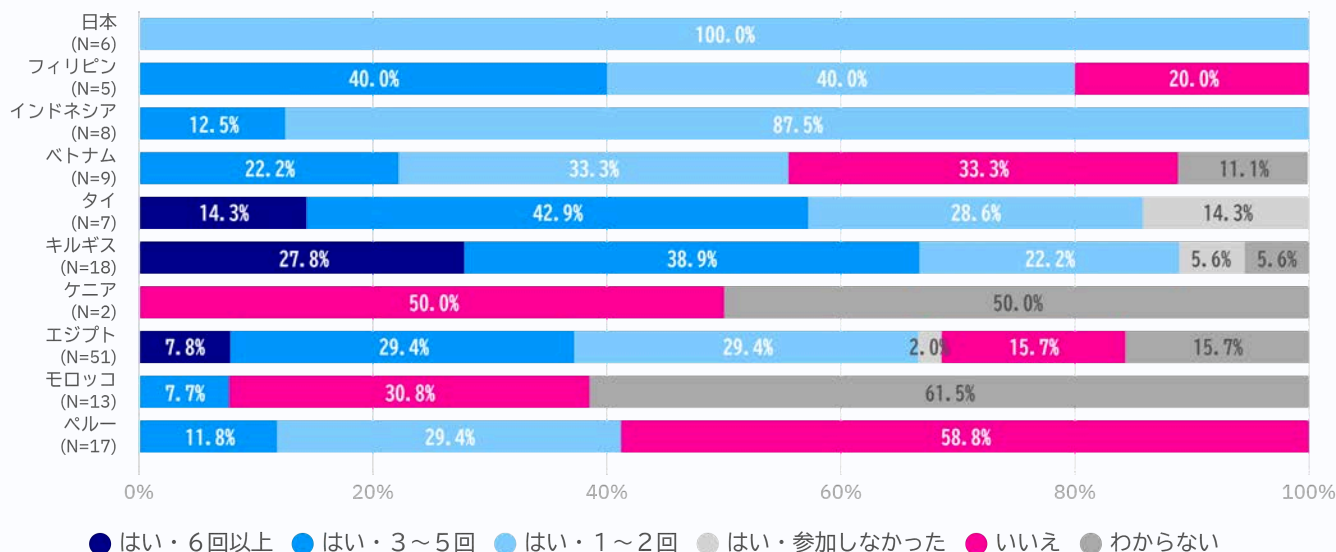
図16-1 日本以外・日本



Q あなたの自治体（国または地域）には、先生の授業の質を向上させるための研修やセミナーの制度がありますか？ あてはまるものを1つだけ選んでください。

「はい」と答えた人は、昨年度、授業の質を向上させるための研修やセミナーに何回くらい参加しましたか？ あてはまるものを1つだけ選んでください。

図16-2 研修の実施状況と参加状況（国別）



注1 1つの学校につき0～数名の数学の先生が回答。割合は参考値。

注2 「日本以外」は日本を除く調査対象の9か国の単純合計（対象国はP5「本速報における分析方針」参照）。

国際基礎学力調査 2026

速報版

本調査は、子どもたちの基礎学力と学びの実態を国際的に捉え、よりよい教育環境づくりの足掛かりとすることを目指しています。今後、国別・学年別・性別・計算力別に詳細な分析を進め、改めてご報告予定です。

調査・分析メンバー

三村 杏奈	主任調査研究員	公益財団法人スプリックス教育財団
秦 徳郎	主任調査研究員	公益財団法人スプリックス教育財団

発行日 2026年10月14日

URL <https://sprix-foundation.org/>